

谷川岳（たにがわだけ）の初縦走は1920年7月2日となっている。藤島敏男（ふじしまとしお）（1896～1976）と森喬（もりたかし）（1896～1989）の登山家2名が地元の案内人のもと、修験者や猟師が使用していた山道を辿り、土樽（つちたる）から茂倉岳（しげくらだけ）、一ノ倉岳（いちのくらだけ）、谷川岳、天神峠（てんじんとうげ）を経由して谷川温泉（たにがわおんせん）まで歩いたのである。この登頂は東日本の登山家たちの注目を集めたが、谷川岳が有名になったのは、著名な登山家・大島亮吉（おおしまりょうきち）（1899～1928）が理想の山として賞賛してからのことであった。

1931年の上越（じょうえつ）線の開通によって、みなかみへのアクセスははるかに向上し、谷川岳は東京（とうきょう）からの登山家たちに開かれた場所となった。愛好家の人気が高まるにつれて事故の数も増えたため、谷川岳には「魔の山」という悪評が立つようになったが、それでもベテラン・初心者問わず、危険な挑戦を止めることはなかった。その後、数々の山岳会が設立され日本の登山者の技術も向上したが、登山中に命を落とす人の数は高止まりが続いた。

1956年、日本の遠征隊がネパールのマナスル山に初登頂したことで、日本で本格的な登山ブームが始まった。1958年には事故を減らす取り組みの一環として、群馬県警によって谷川岳警備隊が設置され、同遭難対策班は地元の人によって結団された。山の安全を守るには厳しい規制を課すしかないように思われたが、地元の登山者グループは規制を設けることに猛反対した。

1930年代以降、谷川岳では死亡者が800人を超えており、世界で最も危険な山の1つとして知られるようになった。それと比べ、エベレストでの1920年代以降の死亡者数は300人程である。谷川岳での死亡事故が最も多かったのは1966年のことで、1年で登山者37人が亡くなり、これをきっかけに安全予防策の不備に対する強い抗議が巻き起こったため、登山者もこれに応じ、1967年に谷川岳遭難防止条例が導入された。この条例によって、谷川岳登山指導センターと、事故と雪崩が最も起きやすい区域を対象とした谷川岳危険地区が設置された。遭難防止条例が導入以降は、安全登山への指導も強化され、死亡者数は徐々に減少傾向が見られるようになった。